IPM実践指標(施設いちこ)						
	管理項目	管理ポイント	点数	昨年 度の 実施	ック欄 今年 度実 担標	今年 度の 実施
- 1	防除計画の作成	栽培開始前に、年間の具体的な病害虫防除計画を作成する。	1 1			1
2	健全な親株確保~ 採苗	親株は、極力毎年更新し、病害虫の感染・寄生のないものを使用する。特に、炭疽病、萎黄病等が発病した育苗施設の苗は親株として使用しない。	1			
3		雨よけ栽培の育苗施設では頭上かん水を避け、立枯性病害(炭疽病、 疫病)の飛散防止を図る。	1			
4		育苗中は、かん水が過度にならないよう留意するとともに、ポットの 間隔を開けるなどして、多湿とならないようにする。	1			
5		育苗に用いる培土や資材は、病害虫に汚染されていない清潔なものを 使用する。 ハダニ類やうどんこ病等をほ場に持ち込まないようにするため、育苗 期の変刻味除ち物度する。	1			
6		朔の柴削の味を取成する。	1			
7	定植時の病害虫対 策	ハダニ類をほ場に持ち込まないようにするため炭酸ガスくん蒸を実施する。※2	1			
8	土壌・培地の消毒	前作における土壌病害や線虫の発生程度に応じ、太陽熱消毒等により 適切な土壌消毒を行う。	1			
9	資材の消毒	前年に使用した資材(育苗ポット、トレイ、かん水チューブ等)は使用前に消毒する。 防虫ネットを設置し、アブラムシ類やチョウ目等の害虫の施設内への	1			
10	物理的資材の使用		1			
11	病害虫発生源の除	内外の雑草防除に努める。	1			
12	去	有色マルチの使用等で、雑草を抑制する。	ı			
13		枯死した苗は速やかに除去する。	1			
14	適正な灌水と適切 な換気	施設内が高温・多湿にならないように、適正な灌水と適切な換気を行う。	1			
15	防除要否の判断	農林水産総合技術センターが発表する発生予察情報やフェロ モントラップ等による地域予察情報等を入手し、病害虫の発生予測を 確認する。	1			
16		施設内を見回るとともに、粘着シート等を利用して病害虫の発生状況を把握する。また、次年度での参考情報とするため、その結果を記録する。	1			
17		前作や近隣の作物、施設周辺における病害虫の発生状況を確 <u>認し、病害虫の発生を予測する。</u>	1			
18	生物農薬使用	ダニ類対策に天敵昆虫(ミヤコカブリダニ・チリカブリダニ)を有効 に使用する。	1			
19		うどんこ病、灰色かび病対策にバチルス・ズブチリス水溶剤等の微生物農薬を有効に使用する	1			
20		天敵昆虫やミツバチ等に影響の少ない薬剤を使用する。	1			
21	薬剤使用	薬剤の選択に際しては、同一系統薬剤の連続使用を避け、異なる系統 の薬剤によるローテーション散布を行うとともに、富山県において薬 剤抵抗性 (耐性) の発達が確認されている農薬使用しない。	1			
22		防除時に施設を一時的に閉める、飛散し難い剤型や散布ノズルを使用 するなど適切な飛散止措置を講じる。	1			
23		薬剤散布にあたって、下葉かき作業後に行うなど、病害虫の発生部位 に薬剤が十分にかかるようにする。	1			
24	ほ場の衛生管理	発病株や罹病部位は、発見次第、早期に除去してほ場外に出し、土壌中に埋めるなどして適切に処分する。 摘葉・摘花をハウス外に持ち出し、土壌中に埋めるなどして適切に処	1			
25		分する。	1			
26	収穫後残渣の処理	栽培終了後の残渣は病害虫の発生源となるため、早めに適切に処分する。 る。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1			
	作業日誌	病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等の栽培管理状況 を作業日誌として記録する。	1			
28	研修会等への参加	県や農業協同組合が開催するIPM研修会等に参加する。	1			
		合計点数	1			
		対象IPM計	1			
	シュ・エー・ 5 畑 エム	対象188日  - 大字体の担合は「0」 典薬土体田学半誌管理ポイントがチェック/			<u> </u>	18

注1:チェック欄では、未実施の場合は「O」、農薬未使用等当該管理ポイントがチェックの対象外であった場合は「一」と記す。 注2:炭酸ガスくん蒸には専用の装置および農薬登録された炭酸ガスを使用する。高濃度炭酸ガスは人体にも有害なので取扱には注意する。